

「東書教育賞は教育現場を支援します」

代表取締役社長 河内義勝

主催者を代表しまして、ご挨拶とお祝いの言葉を述べさせていただきます。

まずは、この度、第22回の東書教育賞にご応募いただき、受賞されました先生方、誠にありがとうございます。心よりお慶びを申し上げます。また、本日はご多忙中にも拘らず、表彰式にご出席いただきましたことを厚く御礼を申し上げます。

昨年は、一昨年の新潟県中越地震のような大きな「天災」はありませんでしたが、親の幼児に対する虐待、続発した児童生徒の「いじめによる自殺」、また一方では、悪質な不正事件も続発しました。「耐震偽装事件」や県知事が関与した「談合事件」、IT企業が引き起こした「証券取引法違反事件」などです。これらの事件が発生した要因は、単に道德観や倫理観の欠如といったものだけではないと思いますが、戦後日本が推し進めてきた社会のあり方、日本人としての価値観が破綻しつつあることを物語っており、同時に我が国が直面している最も大きな教育課題ではないかと考えます。

このような状況の中、昨年末に教育基本法の改正案が可決・成立し、12月22日に公布・施行されました。59年ぶりの改正となります。今後、基本法の改正に対応した関係法令の改正や学習指導要領の改訂が行われることとなりますが、安倍内閣の目玉である「教育再生会議」からも1月末に「ゆとり教育の見直し」など新たな提案が報告される予定であり、それらの影響もあって、伊吹文部科学大臣から「学習指導要領の改訂は来年度=19年度に

先送りになるだろう」との発言がありました。現時点では学習指導要領改訂の時期も新課程の実施時期も不透明な状況ですが、学習指導要領は当初の予定よりも半年以上遅れるのではないかとの見方が広まっています。

さて、「東書教育賞」は今年で22回目を迎えましたが、これまでも大変すばらしい研究と実績を残された先生方が受賞されてきました。今年も、本日受賞された先生方をはじめとして、全国各地から多くのすばらしい研究論文をいただきました。このような先生方が全国に大勢おられることが日本の教育の強さであり、原点だと思います。「東書教育賞」は現場の先生方に研究論文の発表の場を提供し、すぐれた実践や研究を広く教育現場にご紹介して教育の世界へ貢献する、という目的で1984年に創設されたものです。先生方におかれましては、今後も引き続き「東書教育賞」をご支援いただき、また、まわりの先生方にもご紹介いただければ幸いと存じます。

最後になりますが、お忙しいところお時間を割いていただき、予備審査から最終審査までご指導いただきました、寺崎先生、坂元先生を始めとする審査員の先生方にこの場をお借りしまして厚く御礼を申し上げます。また、本日もご出席いただきました報道関係の皆様方にも感謝を申し上げまして、ご挨拶とさせていただきます。

第22回「東書教育賞」の審査を終えて

東書教育賞審査委員会

〔A部門〕

受賞された先生方、心よりお祝いを申し上げます。この東書教育賞も今回で22回を迎えています。過去にさかのぼって応募者数の推移を見てみますと、第1回の昭和60年度は160編でしたが、その後毎回応募数を伸ばし、平成16年度は280編、17年度は287編、そして今回が270編となっております。このように多数のご応募をいただくまでになったことは、「東書教育賞」と小中学校全校に配付する入賞論文集が小中学校の先生方に浸透し、ご支持をいただいている結果と考え、大変感慨深いものがあります。

今回の課題は「生き生きと学ぶ子どもを育てる教育実践」となっております。学力の問題は到達度ではなく学習意欲のことであることがだんだん分かってきたというのが最近の状況だと思えます。子どもたちが生き生きと学ぶことができるためには、教師に何ができるか。それが問われています。これを正面から取り上げたテーマでございました。

毎回この席でお話しておりますが、審査の基準として共通に重視いたしましたのは、次の3点であります。

第一に、実践性の観点です。実践の結果に基づいて具体的に記述され、論じられているか。これは当然のことと思われるかもしれませんが、中にはこれを感じ取れない論文もあります。別の言葉で言えば単に理論や概念が述べられている、しかもその言葉はどこかでみたような言葉ばかり並べられているというのが結構多いのです。私たちは、論文の中に先生方と子どもたちとの関わりや姿が具体的に記述されているかどうかということを、非常に重要なポイントとして毎回審査にあっております。

第二に、創意工夫という観点です。子どもが生き生きと学ぶことができるために、どのような工夫がなされているかということです。

第三に、一般性があるかという観点です。特別な実践ではなく、誰にでも応用できるかどうか。また、子どもの発達段階や適時性への配慮が十分になされているか。あまりに特別な条件の下でしかできない実践は評価できないということです。

子どもは常にこの3点を意識しながら審査をしておりますが、これは口で言うほど易しいことではありません。特に創意性と一般性の二つは、時に矛盾いたします。創意性があるからこそ一般性が薄い、ということはある得るわけです。逆もまた真でありまして、この点は毎回審査会で論議になります。

その他、論文として体裁や、テーマと内容が一致しているかどうか。理解しやすく表現されているか。これまでの発表の状況、字数の制限などにももちろん留意して、慎重な審査をいたしました。

では、A部門の小学校について申し上げます。

小学校の部には150編の応募がございました。この中から、最優秀賞1編、優秀賞2編、奨励賞4編の計7編を選定いたしました。

最優秀賞には、鹿児島県鹿児島市立田上たがみ小学校の田邊源裕もとひろ先生の「子どもたちを歴史にどっぷりと浸らせる授業」が選ばれました。

子どもたちにとって歴史の授業は、ともすれば遠い昔の出来事の話であり、自分の生活とかけ離れたもので終わってしまいがちです。子どもたちにとって身近なものであるという意識を持たせるためにはどう工夫が必要

か。田邊先生が始められたのは、地域教材を発掘活用した授業実践でした。教師も子どもも知らない新しい事実を発掘し、教材化した「発掘教材」を活用すること。教科書の小単元「聖武天皇と奈良の大仏」は「国分寺瓦」を手がかりに、また、「長く続いた戦争と人々の暮らし」は「亡師亡友の碑」に結びつけて授業を行っておられます。この努力は授業の成果として確かに結実していることが伺えます。子どもたちは“どっぷり”と歴史に浸っただけでなく、地域を見る目も育ったに違いありません。地域教材の開発は、卓越した着眼であり、他の学校でも参考になる優れた論文です。

優秀賞の一つには、茨城県銚田市立巴第一小学校の関根幸枝先生の「子どもたちの『このころ』が元気になる健康教育」が選ばれました。

関根先生の実践は、養護教諭として、子どもたちに「豊かなころ」を育むために「このころを耕す健康教育」を目指しながら、グループで「ヒヤッとマップ」を作成したり、本物の救急用品を使ってけがの手当てを考えさせるなど、実践力をつけるステップを用意されています。それとともに、子どもたちが協力し話し合う場を多く設定して、子どもたち自身が達成感や充実感を味わえるよう工夫されているのが大きな特徴です。竹内先生は平成7年度から兼職辞令を受け、全学年の保健の授業を担当し重い責任を負っておられますが、「攻める養護教諭」という言葉でアクティブに動き、単に健康面だけではなく、「ほめる言葉、けなす言葉」についても考えさせ、認め合い、協力することの楽しさを児童に味わわせるなど、養護の範囲を越えたすばらしい実践を記録しておられます。

もう一つの優秀賞には、愛知県知多郡東浦町立石浜西小学校の竹内学先生の「学力低

下を克服し、一人一人が学びの実感をもつ学習指導」が選ばれました。

竹内先生が勤務されている学校の全校児童約300名の内、1/3が日系外国人、1/3が母子家庭、1/3が準要保護児童という構成になっていると記されています。そこで一人一人の個人差に応じた学習、そして、その学習を支えていく人的、物的学習環境の構成の実践を試みておられます。つまり、2教科同時進行の自学自習、それに必要な学習材の準備など、個別化・個性化教育の実践です。学力低下の背景や要因がさまざま指摘されている中で、本実践研究は、子どもたちが学びの姿勢を獲得していく中での「楽しさの実感、自信の実感、達成の実感」に着目して、学習を支える環境づくりに力点をおいた意欲的な実践報告です。学校の生々しい状況がきちんと書かれており、「こつこつコース」「ひらめきコース」といった手法は外に対して強い説得力を持っていると評価できます。

次に、A部門の中学校について申しあげます。

105編の応募がございました。この中から、最優秀賞1編、優秀賞2編、奨励賞2編、特別賞1編の計6編を選定いたしました。

最優秀賞には、東京都羽村市立羽村第二中学校の水野美鈴先生の「総合的な学習『日本らしさって何だろう』（第1学年）の指導」が選ばれました。

この論文は、水野先生の学校の「総合」の学習内容に「日本」という視点が欠けているので、1年生で「地域」と「日本」を併せて考えさせる学習を企画し、その狙いとして、①自国の文化を理解し、外国人に伝えられる、②他国の文化を理解し学ぶ、③どの国、民族とも友好理解を心がける人に育って欲しいと願って実践した記録です。「実践を終わって」のあとがきに、先生は「総合なんてもういらぬという声も聞かれる。しかし私は総

合こそOECDのPISA学力調査で求められているような実社会で役立つ学力を養うことができるものだと考える」と述べています。本実践はこの言葉通り、中学校における「総合」の役割と可能性をリアリティのある実践の記録を通して、確かな事実に基づいて語っています。「日本らしさって何だろう」という総合学習のテーマが、先生の長年にわたる関心事であり、授業者と学習者の探求と学びの重なりが、この見事な実践の背景にあることに注目したいと考えます。私どもは全員異議無く、この論文を最優秀賞に挙げた次第であります。

優秀賞の一つには、大阪府大阪狭山市立第三中学校の奥田修一郎先生の「現代版組踊くみうどりを通じて『いのち』の大切さを伝える」が選ばれました。

奥田先生の学校では、「命の尊重」を重点指導項目にしており、この学習を深めるために、人権学習、特に平和学習の時間と特別活動、それに総合的な学習の時間との関連を図りながら進めています。その中の一つが「平和の舞台」をつくることであり、この舞台は沖縄の中学校と高校との交流から生まれました。「いのち」の大切さを伝える劇（歌、踊り、演技のある現代版組踊）を中学三年生総勢180名の協力で作り上げて上演するまでの過程を記録した感動的な実践論文です。演劇創りの学習活動が、生徒の「居場所づくり」（人間関係づくり）であり、主体性づくりであり、友人・先輩・地域の人々などから学ぶ場になっていることを具体的に示している優れた論文です。戦時中、たまたま対馬丸に乗らなかったために命を失わなかった生徒の祖父の話が大変印象的でした。

もう一つの優秀賞には青森県弘前市立第一中学校の東海孝尚先生とうかい たかなおの「美術の基礎・基本が身に付く指導法の工夫～右脳で見る・描く

～」が選ばれました。

生徒の多くが、絵が上手くなりたいと思っているのに、自分の描く絵に満足できず、絵を描くことに苦痛を感じている場合が少なくない。そこで、東海先生は、カリフォルニア州立大学のベティ・エドワーズ女史が提唱している教育理論をもとに、美術の本当の基礎・基本は右脳を活性化させ、右脳を使って形を認識することにあると考えられました。右脳を用いて物を見る訓練によって、生徒の制作態度が変わってきたことが分かるユニークな実践であり優れた論文です。

さて、先ほども申しあげました通り、この他に奨励賞として小学校の部で4編、中学校の部で2編を選定いたしました。

さらにまた、これ以外に特別賞として、今日の表彰式にご出席いただいております大阪府東大阪市立長栄ちやうえい中学校の山下文夫先生の「いのちの教育『生と死の教育』」が選ばれました。

山下先生は性教育の一環として、生命の尊さを学ぶ学習を長年実践されておられます。教師による説教的な講義によらず、多様な、よく工夫、開発された教材と、考えさせる場の設定によって、優れた学習効果を挙げています。こうした生と死の問題を正面から取り上げる実践は少なく、それだけに貴重な論文であると思われます。暮れの29日の夕方、大変びっくりしましたが、たまたま見ていたテレビ東京の番組で「定年教師が生と死を14歳に教える」というテーマで山下先生の授業実践が紹介されていました。

いずれの論文を拝見いたしましても、今、現場の先生方が、子どもたちにしっかりとした基礎的・基本的学力を身につけさせることに、いかに苦心なさっているかがわかります。他方、一人一人の先生が、第一線で子どもたちを前にして、いろいろと創意工夫をして、

独自の指導技法を編み出しておられるということ、はっきりと読み取ることができました。

どうか、東書教育賞に応募されたこの経験をこれからも生かしていただき、日常の授業の中で、一人でも多くの子どもに、学ぶことの楽しさ・面白さを味わわせていただくことを期待いたします。これをもって審査概要の結びといたします。

最後に個人的感想を加えましょう。

現在、日本ではいじめ、子どもの自殺、不登校、学力低下などあらゆる教育問題について教師の責任を問う声が盛んです。他方、新聞・テレビ等のマスメディアが教師について行なう報道も、「不適格」問題、飲酒運転、セクハラ、不倫、学級崩壊・いじめの責任者等々、教師・教職をめぐる暗く陰鬱なトピックばかりです。こうしたニュースにだけ接していると、日本の教師と学校に絶望したくなる人も多いのではないのでしょうか。

しかし、この東書教育賞に応募された先生方の報告を読んでいると、日本には先に述べたような先生たちのほかに、優秀な、そして真面目な先生方が確実におられるのだ、そういう全く違う教育界の層があるのだ、ということに気付かされます。子どもたちの成長と学びを大切に、注意深く実践を反省し、積極的に「学びの志」を育てようとなさっている先生方です。少なくとも数の上から言えば、このような先生方のほうが遙かに多いのではないのでしょうか。

応募論文の閲読と審査は、私どもに期待と勇気、希望を改めて感じさせてくれます。入賞者の先生方はもとより、応募された先生方全員に感謝し、今後のご奮闘を祈りたいと思います。

(寺崎昌男)

〔B部門〕

受賞者の皆様、おめでとうございます。

B部門の方でございますが、A部門の審査方針に加えまして、情報通信メディアをどのように活用したか、未来に広がる可能性を持っているか、誰にでもできる一般化が可能かどうかなどについて審査をいたしました。お世話になった中央教育研究所の所長さんのさきほどの報告により計算しますと、B部門はA部門に比べ、これまでだいたい10パーセントくらいの応募が続いていましたが、今回は6パーセントくらいの応募とのことです。応募数が少なくなった理由として、ひとつはA部門の中にもコンピュータを使った論文があり、道具としてコンピュータを使うのがあたりまえになってきていること。もうひとつは、情報通信メディアという言葉、その「創造性」となると「私たちにはなかなか難しい」というような気持ちを起こさせて、応募を断念させてしまうことがあったのではないかと考えられます。肩肘を張らないで、ふだんのままでのICT利活用の実践や企画など、そのあたりの実践報告が出てきにくくなってきたかなと思っております。今、次回についてこの点を考え直そうとしております。肩肘を張らないICT利活用の教育論文がたくさん出てくることを願っております。

さて、世界各国の先進国の学校では、だいたいICT利活用のための環境が整っております。私は昨年一年間にロンドンをはじめとしていろいろな国をまわってきました。昨年もお話させていただきましたが、今回もICTの利活用が進んでいる国の様子を紹介させていただきます。

まずシンガポールですが、2回続けて行ってきました。ICT教育が大変進んでいまして、もう教師一人1台のパソコンはあたりまえになっており、次は子供一人1台のパソコンを

考えている国です。学校に行って授業を見ていると、低学年生でもノートパソコンを床においてそこに2、3人の児童が集まり、いろいろと相談しながらソフトを使ったり、中学年以上になるとインターネットで調べものをしたりしています。先生方も子どもたちも全員がコンピュータを自然に使う状況が見られます。ある学校では、児童手帳にコンピュータを使うに当たっての心構えが箇条書きになっており、子どもの保護者がサインする誓約書になっています。著作権、モラル、個人情報などが内容です。全国にクラスターCEOといわれるICT教育活用の専門指導者がいて、学校でのICT利活用を支援し、促進しています。学校には、専任のICT専門教員と校費雇いの技術者が配置され、教師の教育指導を助けています。まさに、シンガポールのICT教育は世界のトップレベルにあります。

韓国もICT教育においては非常に進んでいる国のひとつで、ネットワーク普及は世界一といわれています。韓国では、教育情報のネットワークが完備しており、三つのおもしろい施策があります。一つはエデュネット(EDUNET)という教育専用無料情報サービスです。マルチメディア教材や素材のデータベースを提供し、学校の先生方が授業で使える学習教材を全国ネットから取り出して活用しているのです。韓国の全教師40何万人みんなが使っているということで大変びっくりしたのですが、本当に全員が使っているかどうかは定かではありません。子どもたちも20%程が、学習に使っているとのこと。保護者なども学校でどのような内容の教育が行われているか知ることができます。

もう一つ、学校用のネットに対して、家庭教育では、サイバー・ホーム・インフォメーション・学習システム(CHILS)と呼ばれているネットワークがあります。このシステム

は昨年ユネスコのICT評価審査において最初のトップ賞をとっています。各教科のコンテンツを集め、学習の到達目標とも合わせながら、家庭においてもネットワークを通して学校と同じ学習が可能になるようにしてあります。サイバー教師も手当され、まさに、インターネット家庭教師です。このサイバー・ホーム・インフォメーション・学習システム(CHILS)は今後ますます進展していくものと考えられます。

三つ目は、EBS e-ラーニングというしくみで、2、3年前に始まりました。韓国では大学入試は大変な競争になっています。そこで、経済格差によって全国大学入試に不利な生徒が出ないように、全国どこでも無料で学習ができるようになっていきます。これは、放送教育と予備校教育が合わさったようなもので、ネットワーク予備校と言えるでしょう。韓国では、これら三つの施策を大勢が活用していると言うことです。

ICT教育の先進国であるイギリスは、QCA、カリキュラム標準・資格機構で、日本の指導要領のような基準に基づいて学習の各段階で学力到達度調査を行っています。7歳、9歳、13歳等になると全校で毎年学力調査が行われ、その学校別学力達成度成績は全て公表されます。ベクタ(BECTa:英国教育コミュニケーション技術局)は、学習指導支援、調査研究、評価研究等を受け持ち、また、評価項目を設定し、ICT活用学校評価をし、優秀校にICTマークやICT活用優秀校表彰をしています。また、学校評価に関してはオフステッド(OFSTED:教育水準局)の勅命監察官250名が手分けして学校訪問をし、学校教育がうまくいっているかどうか、施設設備、学習指導、学校経営、地域との連携などあらゆる教育活動の査察・評価を行い、報告書を公表しています。この4月からは、改

組され、勅命査察官350人が、学校教育だけでなく、生涯教育、福祉、看護施設などの活動の評価も行うように領域拡大をします。学校教育が成功してきたこと、それに対して、福祉、看護、生涯学習の質を高めることが重視されてきたからです。学校教育の査察は、成果に基づく信賞必罰の方向から、学校での自己評価による教育改善への促進の方向へ移行し、査察結果を、自己評価に反映させ、学校の自己改善をねらうよう穏当になってきたことも原因の一つと思われる。

TDAは、学校訓練開発機構で、教員の資質能力の育成を目的として活動しています。優れた教師の技能表をもとに、優れた教師、初任教師などを認定します。能力基準閾値を設け、それをクリアすればシニア教師、指導の工夫にたけ、チームを指導し、コーチやメンターの指導ができる教師です。さらに、他の学校教師の研修、地域への支援など幅広い活動のできる教師が、AST先進技能教員となります。日本で考えているICT学校CIOに当たる役割だと思われます。さらに、NCSL全国学校管理職研究所では、管理職入門、副校長、校長、優れた校長の4段階の管理職研修を行い、また、2004年からは、SLICTという戦略的ICT学校管理職研修を実施しています。ICTの普及には、管理職の理解が最重要であることがわかってきたからです。日本でも、このSLICT研修を取り入れようと、先日ブリティッシュカウンシルのお世話でコース開発者を招聘し体験研修が行われました。

ところで、今日、B部門で唯一優秀賞とされたのは、秋田市の金足東小学校ですが、例えば校長先生が代わっても、中心となる教員が転動しても、同じようにICT活用教育が続けられれば、イギリスであれば、ベクタ(BECTa)がICTマークを付与することになるのです。ICTマークは個人に与えられるの

ではなく、団体や学校に与えられるもので、5段階にレベルが分けられています。イギリスでは、このICTマークを授与された学校長は大変誇りに思うとともに、学校評価の向上によって学校の経営も活発になっていきます。

優秀賞を受賞されたB部門の田口先生の論文ですが、金足東小学校では環境学習の三つの活動を設定しております。栽培、探求活動、校外交流の三つです。

栽培活動は「アグリ活動」として稲作りや花壇作りの農業体験をさせる内容です。これまではモチ米作りで、水田を借用していたので、観察が十分にできなかったことをふまえ、観察しやすいようにバケツでの栽培を試みています。ふるさと先生や専門家の知恵も借り、植物の成長に関連する様々な疑問や仮説を実証するために、土壌のPH測定をしたり、顕微鏡で植物の中の水の通り道を見つけたり、温度条件を調べたり、専門家の活動をビデオに撮り参考にしたりと、いろいろ学習が広がり、子どもたちの関心が非常に高まっています。植物の成長には土壌だけでなく、天候も大きな影響を与えていることにも気づいていきます。

そして、これらの実践や科学的な検証をデジタルポートフォリオを活用して次の探求活動につなげています。野菜の収穫量が天候によって影響を受けることをデータに基づいて科学的に検証しています。指導者の方は、デジタルポートフォリオを活用して一人一人の指導に役立てています。これらの体験や成果の発表を通して、地域の方との交流、学校間交流をすすめる、さらにアラスカの学校やフィリッピンの学校とも国際交流活動を展開するというように、総合的な学習として生き生きとした活動へと広がっています。少人数校であるということもあって、ICT関連設備の環境は恵まれています。それを無駄なく子ども

も教師も有効に活用している点など、全体的に見て優秀賞にふさわしいと判断いたしました。

来年以降のB部門については、論文の内容をもっと具体的にした方がよいのではないかと考えています。大掛かりなものではなく、日常的な工夫が出てくるように、たとえばデジタル教科書を活用した実践記録と研究、あるいはデジタル掛図などによる教科教育、プロジェクト、タブレットPC、インターネット活用や携帯端末モバイル活用教育など具体的な事例を具体的に示すことによって、実践のイメージが広がり、応募する先生方も増えるのではないかと思います。情報活用という面では、どの学校にもある図書館メディアの活用や学校経営、学級経営の効率化による学力の向上などもその対象になるのではないのでしょうか。

将来はA部門もB部門もなくなるのではないかと考えていますが、当面はB部門の応募内容についてさらに検討をしたいと考えています。今回はぜひ多くの応募があることを願っております。

受賞されました先生方、本日は誠にありがとうございました。

(坂元 昂)

審査委員の講評・所感

【奥田眞文】

審査につきましては、委員長が申されましたので、私は一寸別なことを申したいと思えます。

おそらく皆さんも御関心高いと思いますが、昨年末国会を通過しました「教育基本法の改正」についてであります。そもそもこの基本法は、戦後の我が国の教育の基本を確立するために、昭和22年に制定施行されたものでありますが、それから既に半世紀以上経っております。

今日は、特に強く、教育の根本に遡ってその改革が求められていることは皆様御承知の通りです。即ち、将来に向かって、新しい時代の日本の教育の基本理念を明確にし、国民全体が共通理解を持って、我が国の未来の進展を切り拓いていくための教育を実践していくために、全く新規に教育の基本を明確にする必要があったのであります。

改正された教育基本法については、既にご承知のことと思えますが、私はここで特に皆様に注意して頂きたい事項についてのみ整理して申し上げておきたいと思えます。それは次のような事項です。

- ① 前文を新設し、本法制定の趣旨を明確にしたこと。
- ② 教育の目的と目標について、「公共の精神」や「伝統と文化の尊重」など今日の重要事項を新たに規定したこと。亦、教育の基本理念として、生涯学習社会の実現と教育の機会均等を規定したこと。
- ③ 旧法に規定されている義務教育、学校教育及び社会教育等に加え、大学、私立学校、家庭教育、幼児期の教育並びに学校、家庭及び地域住民等の相互の連携協力について新規に規定したこと。
- ④ 教育行政における国と地方との役割分担、教育振興基本計画の策定等について規定したこと。

- ⑤ この法律に規定する諸事項を実施するため、必要な法令が制定されなければならないことを規定したこと。

また、本年から、この改正教育基本法により、政府は新たに「教育振興基本計画」を策定することになっています。

このように情勢判断致しますと、これからまさに第3の教育改革が始まるものと思われるます。

教育の第一線に在りかつその担い手である先生方、どうかこれからますます御健康で一層の御研鑽を祈念致します。終わります。おめでとうございました。

【小野具彦】

紹介いただきました小野具彦です。受賞された先生方、まことにおめでとうございます。昨今のいろいろな新聞・テレビ等の報道を聞いて、私は少し憤りを感じたり、いらいらさせられたりすることが多くなっております。

一昨日教育再生会議の第一次報告の内容も含めて、寄せられる教育にかかわる論評にはまったくそのとおりであったり、そのとおり改めないのだめですなどと共感をできることもあります。実際に現場を見ているのだろうかとか、まるで現状認識が間違っているのではないかと思うこともあります。確かに教員としての自覚がなく、努力を怠っている教員がいたり、組織としての学校運営がなされていなかったりが見られることは否定できません。

でもこの東書教育賞に、多くの優れた実践が報告されていることからわかるように、大多数の学校は日々精一杯の努力をして、実践を積み重ねているのが実態だろうと確信しております。私は中学校教育に携わってきましたので、中学校を主体に短評をさせていただきたいと思えます。私見などはありますけれども、お許しをいただきたいと思えます。

いま教育課程の改定が進められているわけ

ですが、その一つは総合的な学習の時間の見直しです。しかしこの時間の趣旨を深く理解し、この時間を意義あるものとしていこうとする教員の積極的な意識と、教員としての力量が不足しているところがあり、この時間の充実が得られていないといった状況があるのは当然のことだと認識しております。残念なことに、そうした教員たちの否定的な意見が、強く大きく世間一般に伝えられてしまっているのが、現状ではないかと思っています。

A部門の最優秀賞を得られた、東京の羽村第二中学校の水野先生の実践は、総合的な学習の時間の優れたモデルとなる実践記録であると思います。国際理解教育の視点からも、わが国の自然や文化の学習が必要なことが言うまでもありません。日本らしさとはどんなことだろうかを課題にされたことが素晴らしいと思います。

やや講演が多く含まれていることが気がかりですが、生徒が受身にならぬよう、自発的な学習活動を広げるよう指導されていることはよいことだと思います。今後は教師からの問いかけのウエイトを小さくされ、生徒からの発展的な課題を多く引き出していけると、なお一層の深まりがあるだろうと思います。なお地域の方々との連携を深められたこともすばらしいと思います。今こそ家庭と地域と学校が一つになって、教育を作り上げていくときだと強く思っています。互いの信頼関係がさらに深まることを期待したいと思います。

次に基礎・基本の定着はいつでも教育課題の第一に挙げられています。そういう意味で、青森の東海先生の実践は、徹底した美術の基礎・基本の定着を目指したものだと思います。生徒の意欲を高め、美術への積極的な取り組みを引き出していることが、たいへん素晴らしいと思います。

次に現今、集団の意識が薄くなっていることが、現場の多くの先生方から聞かれるとこ

ろです。どのようにして学級や学年、そして学校の一員としての意識を高めるかも、教育課題の一つであろうかと思っています。そういう意味で、大阪の奥田先生の実践は全学年が一丸となって取り組めるクミウドイを取り上げ、先輩や地域の人からも学びながら、命の尊さを学び、人と人とのかかわりの大事さを感じとらせている優れた実践であろうと思います。

特別賞を受賞された大阪の山下先生の実践は、性教育という範疇から生と死の教育に発展させ、今日的な課題である命の尊さに気づかせる学習活動です。意欲的な取り組みに感服いたします。

終わりにになりますが、現在の厳しい状況の中での小中学校の先生方に、私は二つお願いをしたいと思っています。一つ目は、一つ一つていねいに着実にということです。多くの学校で流行のみを追わず、きめ細かな配慮を持って着実に、不易な教育活動を推進してほしいと願っています。二つ目は自信を持ってほしい。さまざまな外圧に決してめげず、自信を失わず、一層研鑽をお願い申し上げたいと思います。これで短評を終わります。

【杉山吉茂】

ご紹介いただきました杉山です。受賞者の方々、おめでとうございます。少し偏見があると言われるかもしれませんが、私は数学が主要な研究のテーマです。そういう立場から言うと、教育実践はもっともっと教科の内容を着実に学習する、すぐれた論文が出てほしいという具合に思っています。そういう立場を基本に持ちながら論文の審査をしてきましたが、残念ながらあまりいいものはなかった。どちらかというところにおられる方々の論文のほうに、僕もいい点をつけているということになっています。

それはなぜだろうかと考えたときに二つあります。一つは先ほど評価の前にご指導もあ

りましたけれど、事実の羅列だけに過ぎない。いい実践をしているのだらうけれども、具体的な事実がただ並べられている。何がいいのかということがわからないのか、この事実の羅列からいいところをわかれという格好の論文が多かったのではないか。

もう一方で今度は先ほどどなたかご紹介がありましたように、具体的に何をしたのかわからないけれど、いいことだけが書いてあるという論文。大事なことは、その理論的ないい言葉で語られていることを、具体的な事実に加えながら述べるということが大事なことだと思います。事実だけでも、理屈だけでも。両方がバランスをとって、読んでいる人にそのよさが伝わるような形でまとめることが大事です。

でも周りを見てみると、どうしても実践記録になっていて、その記録だけが一人歩きするような論文が多く、これがここにも表れてきているのではないか。そうならないように、理論と実践が結びついて、よさが伝わる論文の形にまとめていただく。そういうまとめ方が、今日ここにおられる先生方の論文にはよく出ていて、それが私たちに感動を呼び起こして皆さんがここにおられると思います。そういうことを考えて、いい論文がこれから出てくることを期待したいと思います。

もう一つ言いたいものがある、一つはこの論文は1万2000字という枠があります。その枠ということも考えてほしいと思います。いい実践をしたおかげで言いたいことがたくさんある。たくさんあることを何でもかんでも全部言おうとするから、1万2000字の枠の中に入らないか、入っても何しろたくさんあって何がいかかわからないということにもなる。要するに枠に合わせて内容を選ぶ、選択する。それも大事なことだと考えていただけるといいと思います。

そういういい論文がこれから出ていただいで、そういう論文のお手本に先生方のはなっ

ていただけるとと思いますので、とてもよかったですと思いますので、ぜひ学んでいただきたい。どうもおめでとうございました。

【高栗康雄】

今回は応募論文のレベルが高く、入賞とすべき作品を選ぶのにずいぶん迷いました。さんざん迷った末にようやく自分なりの基準で各賞の候補を決めましたが、こういう悩みは大変楽しいものだと思いますし、他の委員の方々も同じように迷われたということがわかりました。

小学校の中で、私にとって魅力があったのは、最優秀賞の田邊源裕先生と優秀賞の竹内学先生の論文でした。田邊先生の論文は6年の社会科で、さまざまな具体的資料を生かし、それらを媒介として学習指導を進められた実践の報告ですが、社会科の学習指導にこうした身近にある具体的な資料を十分に生かしながら、子どもたちを歴史に近づけることの大切さを感じさせ、会得させるのは極めて重要だということを説得力をもって説きあかしている好例だと思います。実践の重みを感じることができました。

竹内学先生の論文もしっかりした実践の裏づけに立った学習指導の実践報告です。先生の勤務校がすでに長く個性化学習を進めていることを知っていてもそれを単に「〇〇学習」ということばによってまとめてしまうのではなく、ここでは学習指導の物的条件の工夫に重点をおいて述べておられるのが注目されました。

実際、学習指導の展開において、物的条件を整え、それを生かしていくことの大切さは、ややもすると見落とされやすいのですが、この論文ではそれを前面に出して述べておられるところに特色が見られると思いました。

中学校では、水野美鈴先生の総合的な学習の論文が優れていると思いました。他の委員の支持もあって最優秀賞を得られたのも当然

と思われました。この論文は学校だけでなく、地域の人々の参加を促しながら学習を展開したところに特色があり、そういう学習指導の態勢の構築までふくめて、厚みのある指導が展開されたものであることがよくわかります。水野先生は、第17回の東書教育賞で入賞を果たしておられますが、今回のものはそれを超えていると思われました。

なお、山下文夫先生の「いのちの教育『生と死の教育』」は、死をとり入れて、そこから命を考えさせるという点で、単に保健体育というよりも、もっと根元的な生き方の教育に通ずるものがあると思いました。その意味で、この論文に特別賞が贈られることになったのは適切だと感じ、賛意を表しました。

【多湖 輝】

どうも皆さん、おめでとうございます。私はいつも論文の評論というのはあまりしないで、勝手なことをしゃべらせていただきますが、この頃それがはやってきて、勝手なことをしゃべる方が多くなって……。時間が押しているみたいなので、あまりしゃべる時間がなくなってしまった。

とにかく皆さんよく忙しい中、おやりになった。私は今年の論文は全体にわりあい水準が高かったと考えて、楽しく読ませていただきました。昔は泣かされるものがありました。ここまでやっている先生がいるかと、ほんとうにそういうものを経験しました。今日いろいろなことを言いたいのですけれど、この間実は長年関西方面で教育委員をずっと続けておられた方の話を聞いて、ほんとうに仰天しました。

つい2、3年前まで、その事実があった。校長室でどうもあそこは荒れているのではないかといって、教育委員が校長室に行って「ちょっと校内を見せてくれ」と言うと、「このまま部屋から出ないでください」と校長が言うのだそうです。「何でだ」と言ったら、

教員会議で決められておりまして、校長はとにかく校長室へ来たら、そこから出られない、出てはいけないという決議をして、これが最高の決議機関である。

教育委員会に至っては、教育委員も同様の扱いですので、校内を見るときか、授業を見るということは一切しないでくれと、校長もそう言う。ほんとうに驚きました。いまだにそんな学校が関西方面では、まだいくつもあるそうです。1、2年ぐらい前まであったそうです。今はいくら何でもないと。だからそういうことが、学校教育の現場でいまだにあるという実態を、まず政府の教育再生の連中というのはどのぐらい知っているのか。

いま荒れている現場はまだたくさんあります。僕らが地方へ行くと、「先生、何とかしてくれ」と。教師がバツと頭をたたいたら、いきなりあくる日から暴力教師といって、バツと新聞がたたく。ところがそんなものではありません。中学校ですけれども、先生方の中でどれだけぶん殴られているか。一言もマスコミは触れてくれない。そういうようなことを訴える校長先生がたくさんいらした。これも実態です。

そういうことは別として、私は最近原丈人君に会いました。原丈人というのはスタンフォード大学を出て、29歳のときに大発明をして、大きなお金を手にしてファンドを持って、世界中あちこちにオフィスを持って、そのファンドを有望な先端科学の人たちに投資をするという仕事をしている人です。

私はてっきり堀江モンのやからと思って、最初はからかっていました。ところがいろいろな論文を読んでいるうちに、これはたいへんな人だということにだんだん気がつき始めて、最近ではそういうつき合いに変えています。この間あるシンポジウムに出ましたら、彼の言うのはパソコンの時代は終わる。自分がいま目をつけているのは、その先の時代の話だということです。

パソコンというのはパーソナルコンピュータ。つまり計算機から出発している。だから今のようにいろいろな使われ方をして、コミュニケーションツールとしても非常にインターネットなどで便利な使われ方をしているけれども、これはおそらくあと20年ぐらいで急速になくなって、新しい世界に変わっていくだろうと、彼は予測をしておりました。

世の中の先端科学の技術の進み方というのはすさまじいものです。そしてほんとうにうかうかしていると、この間放映されていましたが、中国のいま理系の最先端の科学の学生というか研究者、それが1300万人ぐらい、すごい優れた人がいる。これは全部英語をしゃべります。べらべらです。研究室に行ってみたら皆さんびっくりするほど、目の輝きが違います。必死になって勉強しています。インドがそうです。インドはご承知のように、九九は81で日本は終えていますけれど、彼らは19×19まで、ぱっと暗算で答えます。この間もテレビで先生のを聞いて、ほんとうにそうかと思って驚きましたが、75の2乗を計算しなさいというと、我々は普通に75×75とやっていますけれど、そんな計算は全然しないで、こういうときには後ろの75の5と5をかけて5×5=25と。こちらは7、7を一つ8にする。プラス1にする。8×7=56と。それで5625が答えです。

言われたときに、8×7=56。5×5=25。こういうように素早くできる場所は、いろいろな法則を発見して、どんどんそれを子供たちに伝えて、特に理科教育です。とにかく今インドは10億人を超えています。中国は13億と公称言っていますけれど、もう14億と言われています。その中に1人で、この人たちのすごいエネルギー、そしてハングリー精神でががが勉強しているというあり様を見ると、日本なんてほんとうにうかうかできない。

パソコンのさっきの原丈人君のあとの話ですけれども、これはビル・ゲイツが世界でい

ちばん恐ろしい男は原丈人だと言わせる男ですから、これは『WEDGE』にときどき論文を書くし、いろいろなことをやっていますので、ご覧になったほうがいいと思います。私は彼の話でいったいこれからどういうことになるのだと言ったら、例えば自分がエジプトにいて、エジプトの夕日が落ちるのはすごくきれいです。砂漠にバーッと夕日が落ちて「感動した」と言うと、こっちで「どれどれ」と言ったら、ユビキタス時代ですからどこにでもテレビみたいなのをくっつけておくこともできるのでしょう。

それでパッと見ると「なるほど、すごい」というような時代が、もう間もなくやってくるだろう。そうするとパソコンはどうすると言ったら、彼は今の計画ですでにそういうことをやっているらしいです。世界中でそういうことをやっているらしいですけれど、古いパソコンは全部途上国の子供たちにどんどんやって、パソコンの使い方だけを教えてやれば、中央から高度な教育ができる。

みんなの教育程度が上がっていったときに、初めて世界の平和とかいろいろな問題が実現できていくのではないか。そういうようなスケールの大きな話を聞いておきますと、日本の教育界ももう少し目を世界に向けながら、まったく違った角度からがんばっていかないと、ほんとうに取り残されます。

私はいま空港問題なども一生懸命やっていますが、全然世界のスピードに日本は追いついていないということを痛感いたしました。学校教育の現場でも、皆さんこれからほどほどにがんばって。ほどほどにというのは、つまりあまりがんばり過ぎると体を壊してしまうから。私なども寝る時間がない。寝ているのが惜しいというぐらいでいつもうとうとしていて、こんなものはあまりいいことではない。

とにかく情報量がめっちゃめっちゃで、その中を私が適当にバンバンカットしていますけれ

ども、それでもまだあふれるほどの情報に、どうやって向き合っていくか。それだけでもって眠る時間などないです。惜しいという感じもあります。そんなことでがんばってください。どうも。

【三上裕三】

本日、東書教育賞を受賞されました皆様にご心よりお祝い申し上げます。

私は、小学校のA部門を中心に感想を述べさせて頂きます。応募状況を見ますと昨年度よりやや減って150の論文が寄せられました。各教科等の応募数を昨年と比較すると、総合的な学習が16点と半分になり、逆に国語は8点増えて35と最も多くの論文が寄せられました。国・社・算に比べると、理科が極端に少ないように見受けられます。理数科教育の重視が叫ばれている中で、今回はさらに多くの応募があることを期待しております。

さて、最優秀賞を受賞されました鹿児島市立田上小学校の田邊源裕先生、この度はおめでとうございます。「子どもたちを歴史にどっぷりと浸らせる授業」というユニークなテーマでどのような授業を実践されたのかと大変興味深く読ませていただきました。地域教材の開発は多くの学校で実践されているところですが、誰も気付かないお寺の屋根瓦に着目し、そこから全国にある国分寺の瓦に共通に見られる模様から奈良時代の歴史へと展開し、瓦を通して地域の歴史と日本の歴史がつながっていたことに気付かせる授業実践でした。先生の着眼のよさと本物の瓦に触れさせようとする執着心が子どもに感動を与える授業になったものと思います。本物の瓦に接した子どもが「奈良時代の匂いがする」とつぶやいた言葉が印象的です。

かつて、私は、田上小学校を訪問したとき、西郷隆盛の揮毫による「田上小学」という門札と西郷さんの着用した肌着が大事に展示されているのを見学し、歴史が根づいている学

校を目の当たりにして感動しました。

次に優秀賞の愛知県東浦町立石浜西小学校の竹内学先生、茨城県銚田市立巴第一小学校の関根幸枝先生、受賞おめでとうございます。

竹内先生は、「できる」「分かる」という「学びの実感」を子どもたちに体得させたいと考え、一人学びを中心とする「単元内自由進度学習」の実践をまとめられました。教師になって4、5年の若い先生ですが、従来の学習方法を思い切って変えてみようという大変意欲的な実践であったと思います。

また、関根先生は、養護教諭の立場から子どもの「心の健康」づくりに積極的に取り組まれた優れた実践です。何とかして子どもの心を元気にさせたいという先生の熱い思いが溢れています。これは、やがては家庭をも巻き込んだ実践となり、大きな輪となって地域に広がっていくことが期待されます。

奨励賞を受賞された4名の先生方をはじめ論文の内容・質ともに高く、甲乙つけがたい論文が多かったのが今年度の特徴的なことでした。来年度は、さらに多くの応募があることを期待して感想といたします。

【赤堀侃司】

皆さん、おめでとうございます。私はB部門の担当ですが、今回坂元先生がおっしゃいましたように応募件数が減っております。これは私の感じでは自然ではないかと思っております。もともとITとかICというのは道具ですから、道具があまり表に出なくてもよろしいのではないかと。やはり目標といいますか、そのほうが大切ですので、その道具をうまく活用していただいて、教育全体がそれでよくなれば、それで十分よろしいと私自身は思っております。

私も学生を連れて、よく国際会議等に行きますけれども、国際会議に連れて行くとなったら、とたんに学生がCD-ROMで英語の勉強をし始めます。目標があればどこかで勉強

し始めるということになるのではないかと思います。ただ、昨今の道具は私どもの知らないうちに、道具そのものが我々の考え方や、価値観や、感情等に影響を与え始めてきた。そこが逆に今きちっとアセスメントしなければいけないとなってきました。

例えば電子メールなどもそうです。トラブルがいろいろ出てきたりする。たいへん便利ですが、プラスとマイナスをちゃんと考えていかないと、我々が道具だ、道具だと思ったのが、道具が逆に我々自身にいろいろな影響を与え始めてきた。正しい道具の使い方が、今日求められているのではないだろうか。そのような観点で、うまい使い方、ほんとうにこれは教育効果があるというような道具の使い方を、実践の中で求めてみたいということです。

今回いろいろ実践の中で見て、教材の使い方面で面白いものが見つかりました。例えば富士山に売っているジュースと地上で売っているジュースは、値段がどれだけ違うだろうかみたいな発問をして、実際に富士山で売っているジュースの値段をデジタルカメラで撮って見せる。そうすると子供はものすごく興味を持ちました。地上だと100円ぐらいのものが、富士山だと150円とか200円になっているところから、経済の物の価格みたいなものを追求させる授業であるとか、いわゆるそういうようないまい道具の使い方です。

あるいはNHKでやっていた新撰組の番組があった。それを子供に見せるのだそうです。そうするとその番組を見たときに、今まで全然興味がなかった子供が、何とかという有名なタレントが出ているものだから、そこから入り込む。かといって新撰組の歴史的な意味というものはどうなっているか全然知らないから、それをちゃんと学習させていったら、それから歴史が好きになったという実践もありました。なるほどと思いました。

ほんとうに子供に接している先生の見方と

いうのは、たいへん優れたものがあると思うので、そこにうまく道具が絡んで学習効果を起こせたらという感じの論文がたくさんありました。だからそういう点で、特にそれが前面に出なくても、非常に自然にうまく使って、そして効果的になってくれば、B部門の目的は達成されていると私自身は思っております。そういう点で非常にヒントになるというか、私自身が勉強させていただくような論文が多かったということで、感謝申し上げたいと思っております。

また受賞されました皆さんは、その中でもたいへん優れた実践であったということで、ほんとうにおめでとうございました。ぜひぜひまた続けていただきたいと思いますし、ほかの先生方もおっしゃいましたように、学校バッシングの時代みたいなのところもありますが、確かにここに来られている先生方は、力といますかそういうものをたいへんお持ちなので、これからもぜひぜひ続けていただいて、発表していただければと思っています。よろしく願います。